災害救援本部通信

No.18

発行日：2014年8月11日
発行所：真宗大谷派宗務所（組織部）
発行人：災害救援本部長　藤戸秀庸

2014年5月～

現地災害救援本部
福島事務所開所
被災地からの取り組み

福島事務所開所式

東日本大震災から三年半が過ぎようとしております。先般開催されました宗会（常会）で宗務総長は、「人間喪失」という言葉で、震災の問題を捉え直しております。そして、「大震災によって私たちは、大きな衝撃とともに重大な問題を投げかけられております。たいへん多くの方が一度に命を失い、ほんとうに深い悲しみのなか、取り返しのつかない原発事故が起き、私たちは、人知を過信してきた自身の無明性に慄き、自分のあり方、生き方が揺さぶられる重要な問いかけを受けたのであります」と述べられ、震災から問われる課題を個人の記憶として薄れさせることなく、自らの事実として真摯に受けとめ、宗門として復興支援に力を尽くしていくと決意を示しました。

宗派では、これまで原発事故によって被災された方々への支援として、子どもたちの一時保養、県外避難者の集い、旧警戒区域内の寺院の門徒報恩講の集い、また、放射能測定器購入による被爆軽減に資する取り組みなど、出来るだけ地元の方々の不安に寄り添うことを念頭に取り組んでまいりました。

また、除染対象地域にある寺院の除染にかかる経費を支援し、その除染費用を東京電力に請求すべく、原子力損害賠償紛争解決センター（通称・ADR）を通じて、東京電力へ申し立ても行っております。

そして、このたび南相馬市原町別院内に福島事務所を開設いたしました。震災から3年以上が経過しての事務所設置には、遅すぎるというご指摘もいただいておりますが、放射能問題に真向かうのに遅いということはないと考えております。宗務総長が言われるように、私たちは、既に「生き方が揺さぶられるような問い」を一人ひとりがいただいているということを真摯に受け止め、個人の記憶としてだけではなく、世代を超えた人間の課題として受け継いでいくことが願われているのではないでしょうか。

今後、現地災害救援本部「福島事務所」では、現地視察研修として被災地に足を運ばれる団体が増える中、団体の受け入れや視察コーディネートなど「被災地の今」を伝える拠点として、更には放射能汚染の現状把握と情報収集を行ってまいります。

大震災、そして原発事故の直後は、メディアからの情報が大きな役割を果たしてきましたし、被災地からの発信も全国、全世界に届けられていたと思います。しかし、時間の経過とともにテレビや新聞から震災の話題を見聞きすることがなくなってきたのが今の事実であり、仕方のないことなのかもしれません。

だからこそ、今、被災地の現実、放射能被害の現実を五感で受け止めていただきたいのです。被災地に足をお運びいただき、事実を見ていただきたい、叫びを聞いていただきたい…そう、切に願うものです。

最後に、現地災害救援本部「福島事務所」開所後、福島県内に視察で訪れた一部団体の参加者から感想をいただきましたので、紹介します。

花巻組南部ブロックの移動同朋講座が開催され、ブロック内の門徒総勢63名の皆さんとバス2台で、東日本大震災で津波と放射能に被災した福島県の南相馬市を訪問した。

原町別院においてお勤めをした後、仙台教務所の木ノ下嘱託の案内で現地を車内から視察しました。木ノ下嘱託の事実をありのまま語る相に圧倒されつつ、手にした線量計が高い数値で刻々と変化する様は、岩手県にはない放射能被災の深刻さを痛感させるものであり、改めて今回の講座開催の意義を思うのでした。

（仙台教区内門徒　及川新太）

事務所内の様子

福島事務所を訪れた際に聞いた「福島県の中にも様々な町があってそれぞれに名前があるのに、『福島』と報道されてしまう」という言葉が印象に残っている。私自身『福島』を一つにまとめて考えていたように思う。名古屋で暮らす私にとって震災は、精神的には大きな出来事だが、原発事故や津波の被害に関しては、テレビに映る『福島』や『東北』からイメージすることしかできていなかった。それぞれの場所、それぞれの名前、それぞれの人、それぞれの声を知ることが、震災を受けとめる第一歩になるかもしれないと感じた。

（名古屋教区教化センター研究生　玉腰暁広）

狭い福島事務所の中は10人も入ると一杯でしたが、震災当時の地元の新聞や写真が展示してあり、それらを見て、あの時感じた不安や恐怖を思い出しました。原発事故は収束していないし、放射能の影響は確かに表れてきているというお話でした。

また、除染活動も、人々の暮らしに全然追いついていないのが、現状のようでした。事務所の木ノ下氏の案内がなければ、バスの車窓から見える範囲のことしかわからなかったと思います。

（長崎教区坊守　服部祐子）

―― 皆さまのお越しを心よりお待ちしております。――

南薩組育成員研修

『東日本大震災被災地現地研修レポート』

鹿児島教区南薩組では、毎年度１回育成員研修を開催し、他組・他教区との交流を目的に実施しています。今までの研修で主なものとして、「菊池恵楓園」訪問、「奄美和光園」と大島寺訪問、四日市別院参拝があります。そして、２０１２年度は南薩組宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌記念大会の会場に設置した「東日本大震災被災地支援金」募金箱による募金と、組内寺院から募った募金を、「現地災害救援本部」（仙台教務所内）へ届け、津波被災地（野蒜地区・荒浜地区・海楽寺・閖上地区）を視察する研修を行いました。

そして２０１３年度においても、組内にて支援金を募り、６月９日から１１日の日程で、前年度の研修を継続し、現地災害救援本部に支援金を届ける被災地現地研修を実施しました。

初日は、仙台空港で今回案内をお願いした仙台教務所員と合流し、「閖上さいかい市場」にて昼食兼視察を行い、そして南相馬小高地区へ線量計による数値を測定しながら訪れました。この小高地区は津波の被害を受けていますが、放射能の影響でまだ手付かずの状態が眼前に広がっており、車中で線量計の数値に興味津々であった私たちに大きな衝撃をもたらせました。その後、「原町別院」とその境内にある「現地救援本部福島事務所」にて、震災当時の状況と現状の取り組み等の話をお聞きしました。

また、道中に通った飯舘村の風景から、鹿児島の火山灰で痩せた土地でも人は住み続けることが出来ているのに、豊かな土地がありながら放射能によって住む場所が奪われている現実に、人が豊かに生きる方向とは逆の方向に向かうのが原発行政の実態であると感じつつ、初日を終えました。

二日目は、二本松市にあります「眞行寺」

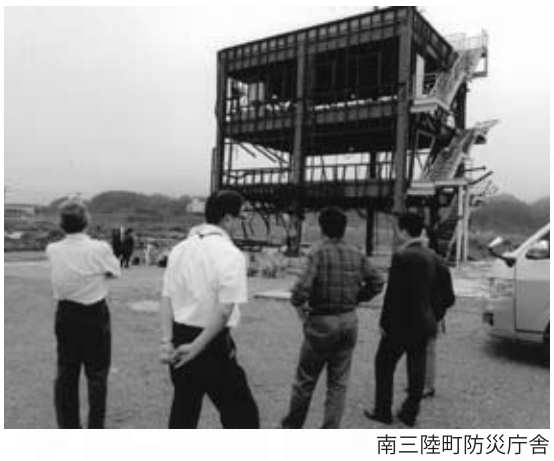
原町別院

で、住職から被災地の現状について話をお聞きしました。話の節々で紹介される放射能の線量の数値については、日常生活で“数値”を気にするといえば、尿酸値・血糖値・血圧等の数値に敏感に反応する私にとっては実感が伴わないのが正直な感想です。しかし、この地で常に線量とたたかい続け、疲弊されている現状をもっと多くの方々に正確に伝え続けなければならないと、認識を新たにいたしました。

なお、訪れた眞行寺では、福島の子どもたちの支援のため、月１回野菜などを眞行寺に届けられている大垣教区の坊守さん方と一緒に“青空市場”を見学させていただきました。また、その作業のお手伝いに来られている多くの方々、野菜などを求めて集まられている方々の姿を拝見し、今私にとって何が出来るのか、これまで遠い地での被害として受け止めていたことに、誠に申し訳なく頭の下がる思いでありました。来られていた若いお母さん方のお話を聞かせていただき、目に見えない放射能とのたたかい、そしてその現実の中で何とか歩もうとする姿を見せていただきました。

眞行寺での青空市場

最終日は、宮城県南三陸町を訪れ、ボランティアガイドの方に案内・説明をいただき、復興現場を視察しました。ただただ自然の猛威の凄さに圧倒されるのみです。昼食会場として訪れた「ホテル観洋」では、震災当時避難所として解放されたところであり、会場まで案内していただいた方が大谷派の僧侶でもあったことから、当日の状況などお聞きしました。そして最後に多くの生徒が被害にあった大川小学校を視察し、言葉もなくただ呆然と立ち尽くし、帰路に着きました。


南三陸町防災庁舎

今回の研修会で、今なお苦しみ続けている大変な現実を目の当たりにいたしました。しかし、日常の生活に戻りますと、衣食住を満たそうとする自身に、被災地の状況を重ねるたび心が痛くなります。

「悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどのあくなきがゆえに」を言い訳の言葉として利用する自力のはからいと向き合いながら、被災地に思いを馳せて継続的に取り組んでいきたいと感じました。

寺院防災マメ知識⑥

災害と地名

災害への備えの第一歩は自分が住む地域を知ること。

カワチ（川内）、ナダ（灘）、ウシ（牛）、サワ（沢）、フカ・フケ（深）、リュウ（竜）など水に関係した字が含まれていれば過去に水害を経験した可能性があります。

また、平地や山間部でも水が集中しやすい場所として「谷」が含まれる地名などは油断できません。ところが、地名は、開発によって「○○が丘」「○○台」等に変更され、地名が水に関係しているかどうか、わからなくなってしまいました。昔の地名を知る方法は、図書館で文献をあたったり小学校の教科書や副読本を見たり、また地域に昔から住んでいる、歴史に詳しい人に話を聞くのもいいでしょう。資料が頭に入ったら、今度は実際に歩いて土地の高低差を体感してはいかがですか。思わぬ発見があるかもしれませんね。